漢字雑談

高島俊男

講談社現代新書

2200

漢字雑談

高島俊男

常州大学图书馆
藏书章

講談社現代新書
2200

N.D.C. 810　262p　18cm
ISBN978-4-06-288200-2

講談社現代新書　2200
漢字雑談
二〇一三年三月二〇日第一刷発行

著　者　高島俊男　© Toshio Takashima 2013
発行者　鈴木　哲
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二―二一　郵便番号一一二―八〇〇一
電　話　出版部　〇三―五三九五―三五二一
販売部　〇三―五三九五―五八一七
業務部　〇三―五三九五―三六一五
装幀者　中島英樹
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
定価はカバーに表示してあります　Printed in Japan

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。Ⓡ〈日本複製権センター委託出版物〉
複写を希望される場合は、日本複製権センター（電話〇三―三四〇一―二三八二）にご連絡ください。
落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、現代新書出版部あてにお願いいたします。

目次

まえがき　3

I　我慢して商売　7

我慢して商売　8
人事を尽して天命を待つ　16
営養・栄養　24
「戻る」の由来　33
光る采配　41
腕ぶす得意舞台　50
私は屈さない　58

Ⅱ リクツについてリクツをこねる

リクツについてリクツをこねる　68
古く中国から入った日本語　76
オニの由来、ほか　84
震災後の言葉　92
篇と編その他　100
改定常用漢字表の愚　108

Ⅲ 英語が入ってきた

英語が入ってきた　118
英語・中国語・日本語　126
明治初頭のベストセラー　133
『西国立志編』の訳語　141
行蔵は我に存す　149

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「拉」の字いろいろ　157
「調査」の由来　165
形声字のはなし　173

Ⅳ　脅迫状三通

脅迫状三通　182
日本は識字率世界一？　190
成語のはなし　198
成語のはなし・つづき　206
微言大義その他　214
敬語と訓読体　221
音節の話　229
歌の漢語音・漢語　237
「自然」の不思議　245
甲板と納戸　253

漢字雑談

高島俊男

講談社現代新書
2200

まえがき

これは、題名どおり、「漢字について雑談」したものです。
もとは、講談社のＰＲ誌『本』に連載したものです（この連載は現在もつづいています）。
そういうものですから、話題はさまざまで、原則として一回一回読みきりです。
どこからでも、お気のむいたところからお読みください。
以上、初めのごあいさつといたします。

（'13・3）

目次

まえがき　3

I　我慢して商売　7

我慢して商売　8
人事を尽して天命を待つ　16
営養・栄養　24
「戻る」の由来　33
光る采配　41
腕ぶす得意舞台　50
私は屈さない　58

Ⅱ リクツについてリクツをこねる

リクツについてリクツをこねる　68
古く中国から入った日本語　76
オニの由来、ほか　84
震災後の言葉　92
篇と編その他　100
改定常用漢字表の愚　108

Ⅲ 英語が入ってきた

英語が入ってきた　118
英語・中国語・日本語　126
明治初頭のベストセラー　133
『西国立志編』の訳語　141
行蔵は我に存す　149

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「拉」の字いろいろ　157
「調査」の由来　165
形声字のはなし　173

Ⅳ　脅迫状三通

脅迫状三通　182
日本は識字率世界一？　190
成語のはなし　198
成語のはなし・つづき　206
微言大義その他　214
敬語と訓読体　221
音節の話　229
歌の漢語音・漢語　237
「自然」の不思議　245
甲板と納戸　253

I

我慢して商売

我慢して商売

漢字は漢語（中国語）を視覚化した文字である。

原則「一語一音一字」（一つの単語が一音節でそれを一字で書く）であるから、いたってわかりやすい。こんなにわかりやすくてしかも優秀な言語・文字体系はほかにないんじゃないかと思う。

同時に漢語は、二音で安定する、という性格を持っている。したがって二音（二字）でひとかたまりの表現（熟語）を作ることが非常に多い。「仁義」「上下」「賢者」「道路」のごとく（どれも『孟子』の最初の所に出てくることばです）。

これらの熟語の意味は、それを構成している個別の語の意味の組みあわせである。「仁義」は「仁と義」、「上下」は「上と下」、「賢者」は「賢い者」、「道路」はみちを二つ並べて「みち」、など。

英語や日本語とは全くちがう。英語のbyはbの意味とyの意味の組みあわせではな

い。日本語の「ほし」は「ほ」の意味と「し」の意味の結合ではない。そもそもbや「ほ」はそれ自身の意味を持っていない。

漢字が日本に入ってくると、日本人は漢語方式で二字の字音語を作った。字音語は本来、字も音も意味も漢語そのもの、もしくはそれに忠実に準じたものであるから、語の意味は、日本語を知らない中国人でも字を見れば見当がつく。たとえば「教室」は日本人が作った字音語だが、字を見れば、「教」する「室」、教えるへやだろうと推測できる。

ところが何百年もたつうちに、右の原理ではわからない語ができてきて、江戸時代のころには相当の数になった。

たとえば、「痛いのを我慢して商売に出た」。

右の「商売（賣）」は日本人が作った日本語（字音語）だが、「商」と「賣」の組みあわせだから、中国人でも見れば意味はわかる。

しかし「我慢」はわかるまい。「慢」は「おごり高ぶる心」だから、「我慢」は「思いあがり」の意としか取れないだろう。とても「たえる」「辛抱する」つまり「忍受」「忍耐」の意味だとはわからないだろう。

なんで「我慢」が「耐え忍ぶ」の意味になるのか。

日本でも、本来は「高慢」「慢心」の意味であった。それが何百年のあいだに、高慢だ

から「我意を張る」、そして「強情」「弱みを見せない」のほうに移動し、さらに、痛くてもつらくても腹が立っても「外にあらわさない」「ぐっとこらえる」の意味に移動したわけだ。

右の「辛抱」もそうである。

「辛」は本来、食物のピリッとしたからさを言う語である。「香辛料」の「辛」だ。そこから「辛苦」などと労苦の意を生ずる。「抱」は「いだく」つまり抱擁の意。とても「辛抱」二字から「耐え忍ぶ」の意は出てこない。

そう言うと、「辛さを抱く」のだから「耐え忍ぶ」を連想できるはずだ、と思うかたがあるかもしれぬ。しかしそれなら「抱辛」だ。ただしこんな漢語はもちろんない。

「辛抱」は日本人が作った日本語であることはまちがいないが、由来はわからないらしい。小学館『日本国語大辞典』にこうある。

〈「心のはたらき」の意の「心法」が、仏教の広まりにともなって一般化し、「たえしのぶ」意に変化したものか。表記も語義に合わせて「辛抱」が当てられるようになったと考えられる。〉

「辛抱」のもとは「心法」ではないか、というのは推測にすぎない。何も証拠はない。

「しんぼう」という語が十六世紀ごろにもうあったことは『日葡(にっぽ)辞書』（一六〇三年にで

きた日本語－ポルトガル語辞典）にXinbôna fito（シンボーナヒト）とあるのでわかる。いつのまにやらできた日本の字音語なのである。

桃太郎さんのせりふ「一つやるから俺の家来になれ」は、日本の子どもは物心ついたころから聞いて知っている。「家来」の意味もニュアンスも、学校にあがる前から自然にわかっている。

しかし「家来」は、字を見ただけではわからない。「家へ来る」の意にしかならない。それがなんで手下の意味になるのか。

これはもとは「家礼」なんだそうです。大昔から中国にある語で、それぞれの家の礼法、の意。それならば字並びから意味がわかる。日本では、呉音で「けらい」、漢音で「かれい」で、同じ意味。

それが何百年の間に、主君（の家）にその礼を奉じて仕える者、主君に仕える臣下、の意味になった。字は「家礼」「家頼」「家隷」などをへて、江戸時代半ばごろから多く「家来」と書くようになったらしい。

江戸時代の大名の家来は、またしばしば「家中（かちゅう）」とも言う。「備前池田の家中」のごとく。これも字は「家の中」だが、もちろん屋内の意ではなく、家来である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com